賞金レース、レアでハイレベルな1年間

# 伝説の航跡 百物語

文　鍋島ヒロシ

毒島誠、石野貴之、峰竜太、毒島誠、毒島誠、寺田祥、峰竜太、馬場貴也、峰竜太と来て馬場貴也。この名前の列挙は何か、最後の方で察しが付く方がおられるだろう。過去10年における獲得賞金2位の選手だ。

2位ではダメなんですか、と言った人もいたけれど、何事もトップを取らないことには名前は残らない。2位が懐かしいのは、日本のGDPぐらいか。ともかく昨年の毒島は、2位に甘んじること3度を経て、遂に頂点を極めたのだった。

その昨年は、獲得賞金1億円オーバーの選手が13名出た。二千年代初頭には及ばないにしても、これは00年の15名、03年の14名に次ぎ、98年、01年と同数である。ただし、2億円オーバーは毒島だけだった。そこへ行くと03年は3名もいた。2位ばかりでなく3位も十分に凄かった。

この年のトップは、この連載前々回で触れた田中信一郎である。賞金王決定戦2度目の制覇を果たすとともに、モーターボート記念でも優勝。その2年前に続いて、2度目の2億円レーサーに輝いた。

そして、十分に凄い3位に入ったのが山崎智也さんだ。1億円超えは5度目でも、2億円を突破したのは初めてだった。思えば2年前の賞金王決定戦でFを犯し、1年間のブランクを余儀なくされて

# 伝説の航跡 百物語

いた。だが、カムバック戦から底力を見せた。いきなり準優勝の結果を出した。

**◎第38回総理大臣杯優勝戦（戸田）**

①西村勝→④山崎智也→②今村豊→⑤松井繁→③田村隆信→⑥原田幸哉／①④②3390円

SG出場2度目の西村が、初優出初優勝の大駆けを成功させた。それも前年の最終2節（桐生→戸田）を連覇してV5に到達…12月31日に出場権をつかむという、強運と勝負強さを見せてのものだった。

このシリーズの西村は、前年末の地元で蒔いた栄光の種を、再び地元で大きく実らせた。エンジンを仕上げてプロペラを合わせて、予選を快走、準優は2コース強まくり。優勝戦も――いまから見れば――かなりの強敵相手に堂々と押し切った。まさに一世一代の走り、選手生活の旬を過ごしていたのが分かる。

一方の山崎は、6着発進から優勝戦に漕ぎつけた。アウトから何もできなかった初戦を見た限りは、ブランクを感じないわけにはいかなかったが、6コース→インという2日目にしっかり軌道修正し、尻上がりの航跡で予選をクリアした。そして準優で植木通彦に競り勝って優勝戦に乗れば、そこではベテランの今村豊、新鋭の田村隆信との三すくみを制した。特に2位競りに決着を付けた、今村への全速ターンは秀逸だった。

大敗で始まったSG復帰戦だったが、準優の頃には「優勝を狙えるアシ」にしていた。その結果がベストではなかったものの、見せ場たっぷり準優勝だ。プロペラの感触をつかんで、何より持ち前のターンで魅せた。今後の展望を大きく広げるものだった。季節が巡って秋のダービーは、同じく戸田が舞台となった。

**◎第50回全日本選手権優勝戦**
**03年11月3日（戸田）**

①山崎智也（群馬）2121221
②高橋勲（神奈川）1416111
③野澤大二（東京）2242131
④松井　繁（大阪）4621132
⑤服部幸男（静岡）5421112
⑥西村　勝（埼玉）4312242

総理大臣杯以上に関東色の濃い優出メンバーだった。再び山崎と西村が名前を連ねていた。そしてもうひとり、外様!?　の松井繁が乗っていた。春はここ一番で機力劣勢に立たされた。今回も着付けに表れているように、さばきを駆使して乗り切ってきた。実はSG優勝がなくてもこの時点で賞金トップ、彼の選手生活の中でも最も安定して成績を出していた。

着付けもレース内容も、もちろんエンジンの仕上がりも、山崎が頭一つ抜けていた。枠番、コースを問わず2着を外さず、準優は他を寄せ付けないコンマ04のイン速攻。圧倒的な人気を集めたのはいうまでもない。

スタート展示は枠なりだったが、松井がスロー起こしを選択していた。「来そうな雰囲気がしていました」とレース後に山崎が話した通り、本番で回り込んできた。それでも3コースまでで、しかもスロー4艇で最も深い起こしになった。一か八かに賭けたレースになった。①②④③／⑤⑥の並び、4対2のスタート隊形から、山崎がトップを切って仕掛けた。

1マークは先に回る山崎に対して、高橋が差し、松井も内をすくったものの、山崎のターンが鋭く返った。そこからのアシが実に力強かった。2マークを確信の先マイ、そこからは独走でゴール、フィニッシュで派手なガッツポーズを決めた。

松井は2マークで山崎にちゃっられ、高橋に難なく差された。その後の道中も後退して、5着に終わった。「このメンバーでは勝負にならないと思って前付けしたが、機力が違い過ぎた」と振り返った。山崎と同じくこの年3度目のSG優勝戦だったが、対照的な航跡を辿った。

[1位]田中信一郎2億2984万円
[2位]松井繁2億2090万円
[3位]山崎智也2億1212万円

ダービーの結果で、一旦は山崎に抜かれた松井だったが、最終的には抜き返し、賞金王・モーターボート記念とSG二冠の田中に次ぐ、獲得賞金2位で2003年を終えている。このランキングと賞金額は、ボートレース史で特筆できるものだった。

賞金王決定戦＝グランプリが創設されて39年、これを制した者即ち賞金トップが、通り相場となっている。39回で例外は8回しかない。その8回、7選手も何らかのSGタイトルに輝いて（うち5回は複数）、賞金レースの頂点を極めた。一方、これまでに生まれた2億円レーサーは、別表の延べ28名だが、その年のグランプリ覇者が19名占めている。対照的にSG優勝なしで、2億円オーバーを達成したのが唯1例。それが2003年の松井繁だったわけだ。

ボートレース史上最も優秀な1年と言えば、76年の野中和夫で、この年の野中はSG2つ・GI7つの記念V9、全体では16回の優勝を数えた。次いで83年の彦坂郁雄は、SG1つ・GI8つを含む年間11度の優勝。ただ、先の野中が当時のSG4大会すべてで優勝戦に乗ったのに対し、後の彦坂はSG優出が勝った笹川賞だけだった。SG戦線におけるインパクトで見劣る。

そして、03年の松井である。SG皆勤で8大会中5大会に優出したものの、先に書いた通り勝ちには恵まれなかった。それでもGIV8は先の彦坂に並ぶ歴代最多。SG戦線の内容では上回っていた。昭和の時代からの賞金増加が手伝って、2億円突破という「ミスター安定感」を存分にアピールした1年だった。

[3月]住之江周年1311111①
◇逃げ→山本浩次→山田豊
前検から圧巻の気配の松井が、5戦4勝で予選をトップ通過、準優・優勝戦とインで連勝した。特にFKSを鳴らした準優は、まくられ差されの苦しい展開。そこから2マーク差し一発で逆転勝利。負けない王者を醸しだしたものだった。

[3月]三国周年3223111①
◇②差し→瓜生正義→山崎智也
序盤勝ち切れなかった松井は、2枠2コースの準優を早差しで1着クリア。返す刀で同じく2コースの優勝戦も、スリットで立ち遅れながら→山崎智也、前競りに絶妙な差し。その後は瓜生との激しいバトルを制した。住之江とはまた違う流れの中、地力の高さを見せつけた。

[4月]多摩川DC34452211①
◇逃げ→山崎智也→岡本慎治
三国にも増して苦戦したシリーズだったが、1着を取れば優勝戦1号艇が約束されていた準優を強まくりで制し、逆にスタートの甘かった優勝戦は、1マークで外が競る隙に逃げ切り勝ち。この年に共通する勝負運と勝負強さを発揮した。

[6月]福岡周年1541241①
◇②差し→辻栄蔵→鳥飼眞
2日目の2走大敗が祟り、ここも外枠に回った準優だったが、まくり差し一閃で1着通過。そして最後は当地独特のウネリを味方につけて、2コース差しを決めた。勝負所を見極めた技の勝利だった。

[9月]下関M大42322211①
◇逃げ→今垣光太郎→今坂勝広
予選ラストに1号艇を残してイン必勝。それまではさばいて着順をまとめ、最後に得点率を更に上げて準優→優勝戦とイン確勝。記念の勝ち方のお手本だが、当時からしばらくは松井繁の、今なら峰竜太の優勝パターンと言えないか。こんな番組になることが格上扱いだ。このときの優勝戦では、今垣の前付けを意に介さず、引き連れて逃げ切った。同時にプロペラに当たりを付けて、夏場の停滞を出した。

[9月]津周年22341111①
◇逃げ→坪井康晴→田中信一郎
松井は再び波に乗った。このシリーズも右肩上がりの航跡を辿った。ただ、優勝戦は2号艇発進だった。坪井が枠番抽選で1号艇に当たり、松井本人も2コースを想定していた。まさか坪井がピット離れをしくじるとは…。こういうツキも尋常ではなかった。松井は難なく逃げた。5コースまで出された坪井が割り差しで、せめてもの2着を確保した。

[10月]下関周年14341142①
◇③まくり→荒井輝年→山崎智也
松井の年間7度目の記念優勝は、3コースを取ってのまくり勝ちだった。ピット離れで枠番よりひとつ内に来て、有無を言わさずトップスタートを決めた。シリーズを通しての成績はむしろ平凡で、特別に出ているわけでなくても、ここ一番はコース取りから非凡なレース。獲得賞金も1億5千万円を突破した。

[11月]三国M大21233111①
◇逃げ→北川幸典→原田幸哉
どうにもSGタイトルには、ソッポを向かれる同年の松井だったが、GI競走では神通力を随所に発揮した。ダービーとチャレンジカップの狭間に位置するこの大会でも、負けない王者を見せつけた。「今年一番の仕上がり」で、終盤の3走は完璧なレース。同年8個目の、結果的には最後のGIタイトルを奪取した。

これで獲得賞金は山崎と僅差に迫り、続くチャレンジカップの準優勝によって、1位でグランプリを迎えることとなった。またしても2度目の優勝は成らず（この最高タイトルは、枠番抽選に左右される度合いが大きい）、最終的な賞金順位は2位に甘んじたものの、SG優勝なしで2億円超えという、現時点では唯一の記録を作ったのだ。3億円突破も狙えた1年だっただけに、本人は不本意だろうが、ある意味その選手像、安定感を表していると思う。

2億円達成件数は28回あるが、うち6回は松井繁である。2番目を数えると峰竜太の3回なのだから、抜けた実績だといっていい。通算獲得賞金額（41億2千万円超）で、2位の今村豊さんを11億8千万円ほど引き離しているのもうなずける。

松井は賞金1位に5回輝いている。グランプリ優勝のある年ばかりでなく、他のSG優勝が後押しした年も2回ある。5回とも2億円オーバーだ。加えて先ほど書いた03年、計6回の勘定となる。最初は98年のことだった。

**◎第3回オーシャンC優勝戦（三国）**
①松井繁→④山崎昭生→⑤沖口幸栄→②岡本慎治→③金子良昭→⑥倉谷和信／①④1140円

3連単が発売されないSG優勝戦を勝った、現役選手も少なくなってきた。西田靖、服部幸男、三角哲男、松井繁、西島義則、市川哲也、濱野谷憲吾、江口晃生、太田和美、今垣光太郎、田頭実、山本浩次、山室展弘、矢後剛ぐらい…か。この優勝は松井にとっては2冠目だった。

しかも、他の5名はSGタイトルに届かなかった（岡本と金子はまだ現役だが）。この時点のSG実績も、松井の9優出1優勝2準優勝に対し、他は金子の2優出が最高。要するに抜けた存在だった。好バランスの仕上がりで、絶好枠に収まった一戦（現在ほどインが強くない時代とはいえ）、負ける要素が極めて少なかった。松井は2年に渡って喉に引っ掛かっていた骨を取るだけだといえた。

何？　骨って。初優勝の2年前、

# 伝説の航跡

児島の笹川賞が、先行する倉谷和信が2マークで自滅（転覆）したことによる「恵まれ」だったからだ。期するもの大のイン戦。スリットでは大外の沖口幸栄が、おやっと思わせる唯一ゼロ台の仕掛けを打ったが、同支部の倉谷が壁になった。こうなれば松井の展開、最も若い大阪支部（とはいえ実績は既に断トツだったが）が余裕を持って逃げ切った。

「これで本当にSGを勝ったという実感が持てます」

松井はようやく人心地付いた。この年この段階で、SG競走4出場3優出1優勝に加えて、GI競走9出場6優出2優勝。その獲得賞金は1億5千万円を超えてきた。山崎智也に5千万円の大差をつけて、賞金レースを独走していた。9月のびわこ周年、11月の住之江高松宮杯で、珍しく2本のFをするなど、さすがに勢いは鈍ってきたが、それでもトップの座は安泰だった。

[1位]松井繁1億8369万円
[2位]濱野谷憲吾1億4804万円
[3位]山崎智也1億3047万円

この年11月を終わっての賞金額だ。縮まったとはいえ2位に3500万円の差をつけていた。しかもベストスリーで、賞金王ファイナルに進んだのは松井だけだった。

**◎第13回賞金王決定戦**
**98年12月23日（住之江）**
①岡本慎治（選出11位）215
②西島義則（選出9位）142
③太田和美（選出7位）332
④松井　繁（選出1位）421
⑤熊谷直樹（選出12位）431
⑥江口晃生（選出4位）114

ファイナリスト6選手を、11月までの賞金額による選出順位とともに記した。トライアルが一筋縄でいかなかったことを示す、下位選出の多さである。

得意の2コースで2勝を上げた江口が、初出場ながら得点トップで進出してきた。いまなら普通に1号艇だが、抽選で引き当てたのは最悪の6号艇だった。松井は何とトライアルオール6コース。枠番は3戦すべてが5号艇だったが、コースにはこだわらず、さばきにさばいてここまで来た。3戦目などはバック3番手から、2マークで大嶋一也を抜き、2周1マークで西島を捕える非凡な走り。年間を通して見せてきた充実のハンドルが冴え渡っていた。

だが、伏兵が牙を研いでいた。松井にとっては同支部の後輩、こちらも非凡な浪花の怪物くん（懐かしいニックネームですね）、太田和美である。25歳にして連続出場、前年は決定戦4着と健闘していた。この年は当地の上位12基中でも、エースと言われた38号機に当たっていた。

太田の課題はスタートだった。トライアル3戦のタイミングが、コンマ24→01→26とバラバラ、「まったく分かっていなかった」。レース本番のピット離れでは外に弾き出された。

そこで気合を見せたのが松井だ。太田と西島を飲み込んだ。西島は改めて内に寄り付いた。岡本と二人で早い進入になった。江口も回り込んできて、結果4コースの松井までがスロー起こしになった。

太田は大カドの5コース発進となった。これが良かった。コンマ06、ドンピシャのスタートが決まった。ダッシュに乗って、グングン伸びて、内4艇とは縁を切った。熊谷を連れて一気にまくった。

「頭の中が真っ白になって、ターンを5回するのが長かった」

もはや独走だった。残りの周回をつつがなくこなして、SG優勝戦では初めて、先頭でゴールを切った。

レース展開だけを見ればスタート、1マークで決着した太田和美の快勝劇だった。これには「1年間このときのために戦っている」松井も「和美にあのスタートを行かれたら仕方がない」と脱帽するしかなかった。

[1位]松井繁2億942万円
[2位]太田和美2億880万円
[3位]濱野谷憲吾1億572万円

それでも最終的な獲得賞金では、太田は松井に及ばなかった。別表の『2億円レーサーランキング』では、62万円の差で22位と23位に並んでいる。因みにこの年の太田のように、2億円超えを果たしたグランプリ覇者が、賞金トップになれなかったのも唯一のレアケースだ。

昨年、久しぶりに13人もの1億円レーサーが出た。今後も賞金増額の流れが続けば、更にレアでハイレベルな争いが見られるはずだ。メジャーリーグなどとは「世界」が違っても、我々にとって億の金額はやはり憧れ。「アスリートで食っていく」者の誰もが目指して、熱くなる領域であるからだ。

**◎年間獲得賞金２億円以上**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1位 | 2002① | 植木　通彦 | ¥284,180,000 | * |
| 2位 | 1997① | 服部　幸男 | ¥255,550,000 | * |
| 3位 | 1999① | 松井　　繁 | ¥254,590,000 | * |
| 4位 | 2020① | 峰　　竜太 | ¥253,020,000 | * |
| 5位 | 2009① | 松井　　繁 | ¥251,200,000 | * |
| 6位 | 2011① | 池田　浩二 | ¥250,810,000 | * |
| 7位 | 2024① | 毒島　　誠 | ¥246,720,000 | * |
| 8位 | 2003① | 田中信一郎 | ¥229,800,000 | * |
| 9位 | 2015① | 山崎　智也 | ¥229,310,000 | * |
| 10位 | 2006① | 松井　　繁 | ¥228,000,000 | * |
| 11位 | 2019① | 石野　貴之 | ¥225,610,000 | * |
| 12位 | 2000① | 市川　哲也 | ¥224,000,000 | * |
| 13位 | 2023① | 石野　貴之 | ¥222,020,000 | * |
| 14位 | 2003② | 松井　　繁 | ¥220,900,000 | |
| 15位 | 1996① | 植木　通彦 | ¥216,190,000 | * |
| 16位 | 2016① | 瓜生　正義 | ¥213,710,000 | * |
| 17位 | 1999② | 今垣光太郎 | ¥213,690,000 | |
| 18位 | 2008① | 松井　　繁 | ¥212,500,000 | |
| 19位 | 2017① | 桐生　順平 | ¥212,210,000 | * |
| 20位 | 2003③ | 山崎　智也 | ¥212,100,000 | |
| 21位 | 2001① | 田中信一郎 | ¥211,700,000 | * |
| 22位 | 1998① | 松井　　繁 | ¥209,490,000 | |
| 23位 | 1998② | 太田　和美 | ¥208,890,000 | * |
| 24位 | 2009② | 池田　浩二 | ¥208,400,000 | |
| 25位 | 2007① | 魚谷　智之 | ¥205,300,000 | |
| 26位 | 2000② | 西島　義則 | ¥203,600,000 | |
| 27位 | 2018① | 峰　　竜太 | ¥202,910,000 | * |
| 28位 | 2023② | 峰　　竜太 | ¥200,820,000 | |

*その年のグランプリ優勝者